

## 令和2年度第2回学校運営協議会 概要

嶺北高等学校

日 時 令和2年11月19日(木)

14:30～16:00 授業「嶺北探究」参観・代表生徒との懇談

18:00～20:00 委員による協議会

会 場 嶺北高等学校 ホーム教室・視聴覚教室・第一会議室

### ◇委員名簿

| No. | 区 分   | 氏 名   | 協議会<br>出欠 | No. | 区 分     | 氏 名   | 協議会<br>出欠 |
|-----|-------|-------|-----------|-----|---------|-------|-----------|
| 1   | 学校関係者 | 山田 憲昭 | ○         | 6   | 地 域 住 民 | 高橋 清人 |           |
| 2   | 保 護 者 | 古谷 雅之 | ○         | 7   | 地 域 住 民 | 徳橋 正人 | ○         |
| 3   | 学校関係者 | 岩本 誠生 | ○         | 8   | 地 域 住 民 | 山下 由子 | ○         |
| 4   | 学校関係者 | 高石 清賢 | ○         | 9   | 地 域 住 民 | 油野 昭彦 | ○         |
| 5   | 学校関係者 | 松岡 寛  |           | 10  | 地 域 住 民 | 山首 尚子 | ○         |

### 《委員による協議会の概要》

- 1 委員委嘱
- 2 開会行事
- 3 報 告

○第1回協議会の内容を受けて、連携型中高一貫教育校における高校入試の方針等について学校側からの報告と確認。

#### 【山田委員】

- ・現在、県教委は連携型中高一貫教育校にかかる特別選抜という機会を設けているが、連携中学校から本校を志願する場合は原則としてこの選抜方法によることとなっている。連携型中高一貫教育を行っている他の高校も同様。
- ・特別選抜はA日程と同様に志願書・調査書・学力検査及び面接の結果等にもとづいて合格者を決定する。かつて連携型特別選抜においては学力検査を実施していなかったが、そのことにより中学校での授業の取り組みが不十分であったり、中学校卒業までに身につけておくべき学力が十分に身につかないままに高校に進学するケースが発生し、高校卒業後の進路保証や中途退学等の課題が生じたため、学習習慣や義務教育段階の学力をしっかりと身につけることや目的意識を持って高等学校に進学することが大切であるという認識から、県教委は平成22年度入試から連携型特別選抜においても学力検査を実施する現在の制度を導入している。
- ・高校側としては、入学者選抜において中学生が嶺北高校の教育プログラムを履修・修得していくことが難しいと判断されないためにも、連携型中高一貫教育の良さをより一層活かした教育活動を改めて展開していくべきと考えている。具体的には、高等学校の教員が中学校へ乗り入れる交流授業を今以

上に充実させ学力の向上を図るとともに、教職員一同が6年間で育てるという共通認識を持ったうえで生徒の学習意欲や嶺北高校への進学意識の向上につながる魅力ある学校づくりに努めていくことが大切と考えている。入学した生徒の高校での活躍の状況や進路状況等についても県教委と共有しているが、連携型特別選抜の今後のあり方については、より魅力的な連携型中高一貫教育の実現という観点から、県教委との協議を今後も深めていきたい。

【徳橋委員】

- ・方針としては、高校の先生が中学校に乗り入れて学力の向上を図り不合格者を出さないように取り組んでいくと受けとめた。

【岩本委員】

- ・全員入学に向けてご努力いただきたい。

○生徒の活動記録について事務局からの報告。コース・部活動等での主な活躍や3年生の進路内定・合格状況について説明。

#### 4 協 議

委員による協議では以下の質疑応答や意見交換が行われた。

○生徒の活動記録について

【山下委員】

- ・カヌー部の競技は四国大会までか、それとも全国大会もあるのか。

【山田委員】

- ・インターハイがある。

【山下委員】

- ・インターハイは四国大会で優勝した新人も出場できるのか。

【総務連携部】

- ・カヌーは他の競技のような選抜大会がなく、夏のインターハイには県大会で優勝すれば出場できる。2022年には高知県主催・香川会場で行われる予定だが、複数校が出場する可能性もある。8月の大会では高校3年生もいる中で優勝や上位入賞をしている1・2年生が、来年は2・3年生と主力になるので多くの種目で優勝が狙えるし、コロナが落ち着けば夏のインターハイにも出場できるのではと考えている。加えて国体もあり、本年度は開催されていないが、予選で勝ち上がれば来年は出場の機会があるということにもなる。さらに、学校の部活動とは文脈が変わるが、カヌー連盟主催の大会もある。本校の生徒にも出場資格を持つ者がおり、各種団体の支援を含め希望に応じて出場できるよう検討する必要があると考えている。

【徳橋委員】

- ・ダム湖はトレーニングに最適な環境として全国のカヌー連盟がそこで選手の強化をしたいという話があり、生徒にも良い影響がでてくるだろう。具体化したらお知らせしたい。県内の練習場はダム湖と須崎の浦ノ内湾くらいしかない。嶺北高校だけでなく他校の生徒も来る可能性がある。

【山下委員】

- ・実際に優勝することは難しく、素晴らしい戦績。浦ノ内湾は観覧場所など立派な設備を整えている。ダム湖も環境は大変良い。そのような中で素晴らしい生徒がいるということは大きな力である。

【山田委員】

- ・カヌーアカデミーという組織があり、本校の部員も全員加入をしている。人間や艇の移動手段、湖面で練習する際の救急体制・安全管理などの課題については土佐町と協議のうえいくつか改善していただいた。12月からは定期的に、全員ではないがそこで練習できるよう整備される。送迎での時間短縮、特に寮生が多いので寮の近くまでの送迎も対応できるとのこと。安全管理面でも指導者がボートの資格を取得して救急体制を整えるなど、トップクラスをめざす練習体制が学校とカヌーアカデミーで両立される。マネジメントは土佐町で行っていただけることになり、ありがたい。

【徳橋委員】

- ・野球の活動が久々に復活した。他の部も含めて、地域を挙げて応援・支援していくということが大事。委員にはぜひ様々な場面で協力をいただきたい。今後も新入生が野球に入り試合のできる形までいければと思う。

【山田委員】

- ・野球の監督は杉山事務長で、野球経験者。年度途中でもあるので、現時点ではグラウンドを使う活動であることを学校が認めている段階。実績が生徒総会で承認されたら同好会に昇格、同好会としての活動が認められたら部活動に、という流れ。同好会や部への昇格で生徒会の予算が割り当てられるようになる。今は保護者会を設立していただき顧問と連携している。
- ・生徒たち自身から「活動したい」という申し出があり始まった。地域に愛される活動をお願いしている。相当な我慢もしながら学校の中で認められる活動をして昇格するというステップを進めていく。
- ・地域の方からもたくさん声をいただき、個人的なご寄付は何件か申出もあり、ありがたい。全体で動くのはもうしばらく温かく見守っていただいてからとお願いしており、振興会も見守ってくれるということになった。
- ・悩みもある。状況の良くないグラウンドに土を入れるといった整備も、実績がないと県も動きにくい。今は石を拾っている。

【徳橋委員】

- ・グラウンドはだいぶ良くなったのでは。土を入れ替える予定はあるか。

【山田委員】

- ・状態はまだまだ良くない。体育の授業もあるので数年前から県に予算要求しているが、活動が広がってくると要求もしやすくなる。しっかり活動してくれることを願っている。

【山首委員】

- ・カヌー部のダム湖への送迎は学校から送迎をして寮に連れて帰るのか。送迎は土佐町が担当するのか。

【総務連携部】

- ・バンによる送迎。授業後と進学補習後で先発組・後発組に別れ、学校発の便

と土佐町の寮発の便となる。運転者は新たに雇用される。ボートの免許を持った方が雇用されるとのことで、安全面での体制も整う。

【山首委員】

- ・部活動は生徒たちにとって励みになる一方で、送迎が大変という側面もある。高校のバスの老朽化や、保護者の協力だけではまかなえないという課題もある中で、生徒への支援として全部活に送迎体制が必要ではないか。地域外の生徒もいる。嶺親の会でも本山町・土佐町のバスを利用可能かという話題が出た。今や先生が自分で乗せてという時代ではない。地域が一体となって安全な子供の送迎を検討する必要がある。

【岩本委員】

- ・梶原高校は町が大型バスを貸与し運転者も構えるなど、行政が県立高校を町立の認識で支援している。本山町もバスの使用規程を見直したり、新型バスの購入で余剰となるバスを高校の遠征に使えるように検討するなどしていきたい。

【山首委員】

- ・嶺北地域の4自治体でバスの運用規程が全て違う。本山町・土佐町のバスを使うのはなかなか難しい。嶺北高校にバスが1台あって、運転者を雇用する予算を本山町・土佐町がみるなど、運用を協議する必要がある。
- ・山間地域の少人数の部活動のモチベーションがあがらないのは、いろいろな場所に試合にいけず、試合不足・経験不足で実績も残せないというスパイラルになっているから。わずか3年、実質2年という中で高いところを見据えて目標を持って取り組む、という体験をさせてあげたい。

【岩本委員】

- ・バスの具体的な話をすると、県立学校の1校として備品の受け入れはなかなか難しいだろう。考え方としては「れいほく未来創造協議会」を拠点にしてバスを置き、人の雇用には町が補助を出すことで動きやすくなるのではないか。その部分は行政の方で確認し、第3回の時に具体的にお知らせする。

【徳橋委員】

- ・進路の合格内定状況の中で、就職が2名。これは地域外になるか。

【山田委員】

- ・自衛隊が1名、もう1名は県外の企業。

【高石委員】 先日見たときより進学が1名増えている。

【山田委員】

- ・昨日4年制大学の合格通知がきて1名増えた。その子はまだ上をめざしているので併願校ということになるが、愛媛県の私立を一般公募の推薦で合格した。この後は国公立の入試が控えている。

【高石委員】

- ・合格している大学の入学手続金などは。

【山田委員】

- ・国公立の結果が分かるタイミングにもよってくる。

【岩本委員】

- ・関西学院大学が「ぜひ嶺北高校から」という話もある。枠があるのでは。

【山田委員】

- ・指定校としての枠をかまえていただいている。起業の学科に限らずどの学部学科でもよいこととなっている。志願者を育てなくてはいけない。

【岩本委員】

- ・工科大の先生からもぜひ受験をとという話を受けている。

【山田委員】

- ・工科大を受験したいという者もいる。進路部を中心としてターゲットを絞った計画的な指導を行っていきたいと考えている。本年度の3年生は少人数だが、生徒たちはよく頑張った。劣等感を抱えさせないように今までしっかりと育ててきた。引き続き卒業まで指導していきたい。

【高石委員】

- ・関学の枠について、出願資格は嶺北地域出身でなくてもよいのか。

【山田委員】

- ・いったんは自前で学費を全額負担し、卒業後に地域から4年間の授業料が補填される制度という理解をしているが、出願資格の詳細は再度確認する。
- ・募集枠は1名。もともと起業の学科でスタートして興味・関心のある者を推薦するという趣旨だったが、その後、学部学科を限定しないこととなった。

【高石委員】

- ・来年からは地域外生も進学し始めるので情報提供を。

○「嶺北探究」参観・生徒との懇談会について

【徳橋委員】

- ・「嶺北探究」のような学習で高校の段階からトレーニングをしていくと大学でも通用するし社会人になっても通用する。充実・強化を図るべきだが、どのように充実・強化するか。先生方の負担もある。即結論ということではなく委員の皆さんの感想や意見をいただければ。
- ・中教審では普通科を再編した地域探究的な学科についての議論もされているようであるが、それらも視野におきつつ、嶺北高校がどのような道を進んでいくかということも、今後、皆さんと検討していきたい。

【山首委員】

- ・「嶺北探究」を参観して本当によかった。社会福祉協議会でも10年ほど中学校の探究をサポートし、相当な時間数をさいて成功体験、あるいは形になった体験をさせるということをやってきたが、今日の高校生を見ても、非常にリアリティのある、子どもたちが大人として社会に入り込んでいける学びであると感じた。
- ・中学校で経験した子どもたちの積み重ねのうえにこの探究の時間ができるのではないかという可能性を感じる。商品開発やビデオ作品といった高校生の成果を町が産業や観光に組み込んでいくところまでいきたい。これを「楽しかったね」で終わらせるのはもったいない。
- ・教員以外でコーディネーターやサポートの担当者を置く必要がある。もう一歩仕上がるまでやらせたい。リアリティのある授業・リアリティのある学び、

何かを見つけて変身する学び、やらされているのではないという子供の前向きな学びを社協もお手伝いさせていただきたい。

【徳橋委員】

- ・県としてもぜひお手伝いできればと思う。

【高石委員】

- ・先日、尾崎前知事と話をする機会があったが、平成26年に嶺北高校を訪れた際に、生徒の90%が将来は嶺北地域に帰ってきたいという思いを持っていたことに触れ、自己肯定感の高さに感心したことを憶えてくれていた。
- ・自己肯定感を育てるには探究学習が大事。探究学習を通じて嶺北を知り嶺北地域で育っていく中で自己肯定感が向上すれば、将来地域に戻りたい子供が90%以上という状況になるのではないか。代表生徒との懇談で「嶺北高校を誇りに思っているか」という質問に対して手は上がらなかったが、誇りに思っていないわけではなく、今は手を上げるところまでは意識されていないだけで、これから変わっていくのではないか。「友だちを誇りに思える」「自分に自信がある」という質問には全員手が上がったので、そういう面では自己肯定感がずいぶんと育ってきているのではないかと思う。
- ・探究学習については、達成感が持てる時間を確保してあげることも大事。量的な部分でも充実させてあげて欲しい。

【山下委員】

- ・今年は4大卒の新入社員を3名迎えたが、面接では考え方や過程・成果の話をしている。仕事の説明にしても作業の手順を言うのではなく「地域を幸せにする」という中身の話をしている。「嶺北探究」は夢を生徒に与えていく。自分たちのときは詰め込み教育だったが「嶺北探究」では生徒たちがそれぞれの視点で発表していた。やがて職場においても自分で考えて自分で結果を追求するようになっていくのだということが、参観して改めて腑に落ちた。
- ・生徒が明るいのも良い。まだまだ伸びるという勢いを感じる。

【徳橋委員】

- ・公設塾にも皆がにこにこしながら来て、にこにこしながら先生と会話や勉強をしている。

【山田委員】

- ・ストレスは少ないのではないかと思う。新しい生活様式についても、高校生が率先して、小学生や中学生のリーダーになってもらいたい。

【高石委員】

- ・今の社会で求められるのは課題解決能力。何か課題にぶつかったときに自分で解決する能力が今の社会では大事。
- ・嶺北高校がマイナススパイラルの時はマイナス思考になり生徒も減っていった。雰囲気も今と違っていたが、あるきっかけで生徒たちは変わり、プラスのスパイラルにまわりだす。このスパイラルを続けていかないといけない。
- ・生徒も先生も入れ替わる中で、変わらない地域の支援体制が必要。生徒は「地域の人と関わりたい」「探究学習を通して地域の魅力を地域の人にも実感してもらいたい」と言っていた。今が好機。

【山首委員】

- ・スピード感を持って探究の時間に取り組める環境を作らないといけない。探究の時間には様々なプロフェッショナルの人たちが関わるが、コーディネートを先生方がやると広がりやスピード感に課題が生じる。そこを社協が先生方の意向に沿ってスピーディーに対応する。情報ネットワークを使いタブレットを駆使して生徒たちが休み時間などにも地域の人たちとやり取りができれば、嶺北の人に関わりやすくなる。関わった人たちも嶺北高校を誇りに思うようになる。先生方の負担も軽減できるのではないか。コーディネートとは関わらせていくこと。先生が入れ替わっても地元でサポートができる体制を早く作りたい。

【高石委員】

- ・その方が長続きする。

【徳橋委員】

- ・「れいほく未来創造協議会」の人材育成グループが立ち上がるが、そこは。

【総務連携部】

- ・学校がお膳立てをするのではない、いわゆるコンソーシアム。このメンバーや役場の職員、ある程度の分野を集めたコアメンバーがいて、常に情報を共有する。3学期になれば1人1台タブレット体制が整うので、そうしたICTと地域のコンソーシアムをミックスさせた、人に関わってもらえる体制を構築準備中である。
- ・生徒たちが地域に出向く移動費も本山町から協力をいただき、つい先週も地域に出かけたところである。今後も出て行く予定があるが、その際の移動手段の補助もいただいている。年度末までにはそうしたICTとコンソーシアムの体制を形にしたいと考えている。
- ・新しい組織ができあがるというよりは、嶺北探究に対して協力してもらえる体制を整える。マネジメントは教員と地域学校協働活動推進員が行う。

【山田委員】

- ・事務局は学校にあってもよいと考えている。法人とも協力体制は作っていく。

【総務連携部】

- ・昨年度も実際そのように動こうとしていたが、コーディネートの部分でうまくいかず、地域に出ずにスキルトレーニングを行うばかりになってしまっていた。やはり学校や地域学校協働活動推進員、退職した学校関係者の方、地域の方、役場のOBといった方々に入ってもらいマネジメントしていく方が機能するだろうということになり、令和2年1月から準備を進めている。

【山田委員】

- ・地域学校協働活動推進員は県教委の生涯学習課から委嘱され、学校の探究活動やその他支援が必要なところに配置される。そこに地域の人が入って動いてもらうという方向。

【山首委員】

- ・推進員がコーディネートをするのか。推進員の役割は。

【総務連携部】

- ・地域のコアになる人と連絡をとり紹介するといったコーディネートを行う。今年2名の枠を設けてこの会や役場などでも呼びかけてきたが、地域でなかなかそういう人材が見つからない。

【山田委員】

- ・推薦してくださる人ならどなたでもいいと思うが、地域に詳しい行政のOBや教育分野の方が適しているのではないかと考えている。教育分野では、現在本校に来てくれている時間講師が授業以外の時間で動けるようにしているが、地元の人や地元で詳しい人がもう1名いて、コンソーシアムのマネジメントをしてくださるとありがたい。

【徳橋委員】

- ・どういったかたちで運営し進めていくのかイメージがわきにくいので、できたら文書に起こしていただきたい。

【山田委員】

- ・3回目の会で概要をお伝えする。

【徳橋委員】

- ・今の話では非常に弱く、その方法でできるのだろうかという印象。どんな工夫ができるか校長先生と検討し、あわせて皆さんに協議していただきたい。

【油野委員】

- ・「嶺北探究」を参観して、生徒の距離感が近く仲の良い雰囲気というのが率直な意見。授業後の懇談会では、大人が大勢いる中で自分の意見をあれだけきちんとと言える生徒がいることに感銘した。どうしたらそんな生徒が育つのかと思って授業を振り返ってみて、考える学習、探究の中で課題解決学習をしているのだと思った。地域から聞き取った現状と課題をまとめたポスターが廊下に貼ってあったが、ぜひ若い生徒さんたちが考える解決策も見てみたい。

【岩本委員】

- ・高校生があれだけきちんと自分の意見を述べられることはすばらしい。ただ一方で、防災の非常食など実際問題として災害が起こるとああいったことはできない。防災の実際、震災で何が起こるかまず知らないと、防災に対して甘い考えになってしまうのではないかと。避難所の問題などにも取り組んでいるが、あの中で描いたものだけで実践しようとする、現実に向き合ったときに大きなショックを受けてしまう。災害の実際を知ったうえで防災に対する発想をしていかないと現実的ではない。

【徳橋委員】

- ・探究学習は1年生の時にテーマ設定をしてメンバーを組み、1つのテーマを3年間でやるということによいか。

【総務連携部】

- ・1年次には地域を知る活動でグループを作るが、その後さらに深めるという段階でグループが変わる。2年次は最初のグループ、あるいは個人での活動が続く。3年次には活動内容の外への提案や様々な大会出場などがあるが、2年生のメンバーのままのグループもあれば個人個人になることもある。嶺北という課題にはずっとこだわるが、各自の興味・関心にあわせて少しずつ

グループのかたちは変わっていく。テーマを変えずにグループのあり方として変わっていける仕組みである。

【山田委員】

- ・来年度で1サイクル目を迎えるので見直しや調整もあり得るが、進路につながらないかという考えが強くある。やりきって終わりという問題は地域にはなく、地域の方は生涯をかけて課題に向かっているし新しい課題も出てくる。解決策はもちろんあって良いが、表面的な提案に終わるよりは、3年生になってもなかなか解決しない課題を突き詰めるためにその仕事に就くとか、大学でもっと専門的に取り組むとか、入り口としてどの分野に行くか見極めるのが高校生活の最後の部分ではないか。達成感を持ちつつ、終わったというのではないかたちに持って行くという意味で進路に結びつけるようなアドバイスもしていきたい。

【高石委員】

- ・探究で学習したことは進路には役立たないということか。

【山田委員】

- ・そういう意味ではなく、つなげていくという意味。探究したテーマが課題解決しきったように勘違いするのではなく、達成感はあるがまだ何か残ってものいるという部分を大切にすること。包括的にやるとどうしても薄くなるので、課題が残っている状態で進路決定する際に、学校選びや学部選び、職業選びに結びつかないか、テーマとして進路につながっていないかという思いがある。

【山首委員】

- ・20年位学生の受け入れをしてきたが、学生は本当に変わった。高校でそれだけの経験をしている子が地域協働学部などに入り出したということもある。実際にやってみたい生徒に早くその環境をつくるというのは中高連携できるところ。是非取り組んでいただきたい。

【山田委員】

- ・高校生は未成年ということもあり、大学生のように自由に動けないという制限もあるが、保護者の理解も得ながら地域に入るといった経験をしておいたら、大学生にあるいは社会人になったときに強いだろう。

【山下委員】

- ・どこに聞きに行ったらいいかわからない状況で、自分の思いだけで3年間過ぎすよりも、まずは経験のある人の話を聞くことで、自分の思っている世界、持っている情報とはまた違うという深い経験が生まれる。あの生徒たちなら深みのあるいろいろな経験・情報を集積してさらに良いものができる。

【岩本委員】

- ・特徴を持たさないといけない。特に嶺北高校にあっては防災に力を入れてやろうとしているが、高校生で防災士を育て、資格を持っている者が何人もいるというような、特徴ある取り組みが大事。防災士を専門的に養成し学生は卒業後に全国各所で防災士として活躍するという大学の例もある。

【山首委員】

- ・コーディネーターがする仕事は人材バンクをつくること。人材バンクとITでつながるネットワークを作って、先生が入れ替わってもしっかりと速いスピードで取り組む。短い高校生活の間にどれだけ充実した人と接することができるかという環境を整えていく。それが協働推進員の仕事。嶺北でぜひ実現させていただきたい。

【岩本委員】

- ・梶原は定員60人程度の寮ができる。ワンルーム方式でバス・トイレ・ミニキッチン・エアコン・レンジ・冷蔵庫・洗濯機など生活設備もそろっており、これから先の時代の寮だと言われている。

【総務連携部】

- ・全国もその傾向である。そうでないと生徒が集まらない。

【山首委員】

- ・県外の寮で、縦の班と横の班で厳しく指導されると同時に全員1人部屋で個人が守られているという例もある。規律がしっかりある中でも自分で夜食を作って食べる程度のことはできるような環境は与えてあげたい。

【古谷委員】

- ・新寮の完成は予定通りか。

【岩本委員】

- ・予定通り、間に合う。

委員による協議は以上。

5 連 絡

- ・事務局より今後の日程等について事務連絡。

6 閉会行事

徳橋委員より第3回の運営協議会について、学校側と協議をし必要に応じて臨時の協議会を行う可能性もあることを説明、会全体でその旨を共有、閉会。